

三拍子のエンジン鼓動音が彼女の咳をかき消す

「陽」は探している。駐車場と未来。咲かされたええ感じの未来じゃなく、土に咲く、ホンマもんの「花の名前」でも、まず…この辺、路駐アカンねんなあ…

20 世紀エコテック少女

名づけられなかった未来
くろニクル

Volume 1

はじめに

Episode V 揺らぐ花、揺らぐ価値

Episode III めくらの国からこんにちは

Episode I、II、IV 次巻以降 ダイジェスト 紹介

ストーリーに関わる キーワード

4

10

55

82

86

企画コンセプト

- ・ 思想実験的物語
- ・ 公害・開発・国家管理型エコロジー・ジェンダー・サブカル批評を軸に据えた、20世紀日本の「環境思想批評小説」

形式

- ・ 従来の純粹文芸とも異なる。
- ・ 従来のマンガ原作とも異なる。
- ・ 思想を可視化する物語的試み。

想定形態

- ・ 批評・思想系の単行本（ビジュアル資料・ネーム資料含む）

背景テーマ

- ・ 近代国家による「押し付け型の未来像」
- ・ EXPO70・EXPO90花博・EXPO2025関西万博が描いた高度成長の夢
- ・ 国家主導のエコロジーという矛盾
- ・ 「公害と成長」「癒しと欺瞞」の二重構造
- ・ 消された声／消された町
- ・ 尼崎・西淀川を含む都市部被差別地域の存在と公害問題
- ・ その中で育った女性医師が見た「名づけられなかった生活」
- ・ 思想の継承
- ・ 母（1970年代）↓娘（1990年代）↓21世紀を照射
- ・ 管理される「エコ」ではなく、土に根差す「再生の思想」へ

扱う批評領域

- ・ 20世紀思想批評（近代・国家・公害・開発）
- ・ 環境思想・エコロジー批評
- ・ フェミニズム・ジェンダー批評
- ・ サブカルチャー批評（花博・万博・1990年代オタク文化）
- ・ 民俗学・差別構造論（部落問題）
- ・ ポスト資本主義的幸福論

企画の立ち位置

- ・ 批評対象ではなく、批評そのものを物語化
- ・ 既存作品の後追いの批評とは異なる

扱っている主題

- ・ 「思想↓世界観↓キャラクター・物語」の順に設計
- ・ 公害・差別・経済・開発と環境・オタク文化・家族観・思想の継承
- ・ 「エコとエゴ」「進歩と調和」「痛みと再生」

なぜ物語形式か

- ・ 哲学的・思想的命題は抽象性ゆえに読者層が限定されやすい↓物語形式により思想の読者接続性を拡張

- ・ 「物語を通じて思索させる構造」を仕掛ける

『20世紀エコテック少女』とは？

- ・ ジャンル 架空史×植物詩学×社会批評
 - ・ 主題 「未来は誰のものか？」を、母娘と植物の記憶を通して描く
 - ・ 構成 1970年万博〜90年花博に至る母娘二世代エピック
- 特徴
- ・ 架空の『解放新聞』連載、ADVゲーム、批評的サブカル演出
 - ・ 「国家と花」「癒しと記憶」をめぐる思想性の高さ
 - ・ パビリオンごとに社会批判と詩的視点と交差
- 想定読者 昭和〜平成批評層、思想系創作、批評漫画を志す層
- なぜ今、万博を描くのか？
- 2025年、再び大阪に万博がやってくる。だが、その「未来感」に既視感があるなら、それは当然だ。なぜなら、1970年の時点で、すでに未来は使いまわされているからだ。

各エピソードの思想・主題と構成一覧

EP	タイトル	舞台年/場所	主人	主題
V	揺らぐ花、揺らぐ価値	1990 花博	陽	エコの消費と草の記憶
III	めくらの国からこんにちは	1970 万博会場	涼香	国家の未来の虚構
I	おしの痛み	1960 神戸	涼香	差別と医の目覚め
II	つんぼの万博前夜	1968 尼崎	涼香	公害と思想闘争
IV	未来に花は咲くか	1985-89 尼崎	陽	癒しと再接続

1. 「未来」と「過去」が交差する、「記憶」としてのエコロジー思想叙事詩¹⁾

この作品は、単なるレトロSFでもなければ、懐古趣味のEXPOノスタルジーでもありません。

むしろ、「エコ」や「未来」という言葉が、いかに権力や欺瞞と結託し、個人の生を踏みにじってきたかを、母娘二世代の視点から告発し、再定義しようとする試みです。

・ 万博＝国家の理想

・ 花博＝企業の理想

・ 『七色の花』＝未来の象徴

それらがいかに「押し付けられた幻想」であり、陽や涼香がどのようにその幻想を「耕し直す」ことで、「名づけられていない未来」に向かっていくか――

2. 母から娘へ、記憶のボタンをつなぐ物語構造

・ 涼香 (EP I～III) … 高度経済成長と公害・差別に抗った医師

・ 陽 (EP IV～VI) … 90年代の「偽エコ時代」を旅する植物批評家

この母娘関係が象徴するのは、『思想の世代継承』であり、『抑圧された声の再定義』で、

花＝記憶の保存媒体²⁾

単なる家族の絆ではなく、政治と倫理の断絶を超える運動体として、母娘は『花』を通して会話を重ねます。

「言葉にならなかった過去」が、「香りで語られる現在」になる。

その詩的で静謐な構造が、深い余韻を残します。

3. 『ええ感じ』の日本的価値観への批評と再構築

本作は、「万博」「花博」といった祝祭空間に内在する表面的な理想主義、同調圧力、環境の名を借りた破壊を徹底的に暴いています。

Episode IIIでは70年代の社会問題を部落差別、女性軽視される医師として、

Episode Vではそれをサブカルの「ギャル語」「ファジー」「ミツグ君」「ゾンビ」など、軽薄に見える文化が

思想の空洞を可視化する批評装置として、1990年代の俗文化と批評が溶け合う独自の表現で描いているのが

特筆点です。

「花は誰のものか？」

「未来って、どこの誰が決めたん？」

「環境って、そんなにきれいなもんなん？」

この問いが、一貫して『昭和の終焉』と『平成の曖昧さ』の中に突きつけられています。

4. メディアミックス幻想としての『架空史』の面白さ

・ 『解放新聞』（大阪版）『連載』(Episode I-III)

・ 実在しない『ディスクシステム』ゲーム展開 (Episode V)

という設定を活かしたあり得たかもしれない1970～90年代の再構築が、リアルと虚構の境界を揺さぶる魅力になっています。これにより、読者／プレイヤーは「こんな作品、ほんまにあったんちゃうか…？」と錯覚する『記憶のねつ造』に巻き込まれる。

5. 『植物』を通して語る、癒し／毒／記憶／希望

Episode IV・Vの主人公・陽が植物や人に語りかけるシーン、ハーブやアロマがもつ薬理性・呪術性・記憶性を語るシーンは、他のどの作品とも異なる唯一無二の詩学的魅力を持っています。

- ・ 雑草は駆逐すべきものか？
- ・ ハーブは癒しなのか、偽薬なのか？
- ・ 咲く花と、咲かせない花の意味は？ こうした問いは、単なる『エコ思想』ではなく、言語を超えた植物的思考、身体的記憶への回帰に通じます。

総括 『20世紀エコテック少女』の最大の魅力とは

- 「過去に咲かなかった未来を、花としてもう一度咲かせる」こと。
 - 『植物』という声なき記憶媒体を通じて、社会と倫理の黙殺を批評すること。
 - そして、『母から娘』という連綿たるつながりの中で、名づけられていない未来を取り戻していくこと。
- 本作は、1970年万博～1990年花博を横断しながら、「国家と未来の虚構」と「植物的記憶による抵抗」をテーマに描く、思想的連作エコロジー叙事詩です。

思想を『語る』のではなく、思想が『育つ』場所を提供します。

20世紀エロテック少女 ~ Reloaded ~

Episode 7

揺るぐ花、揺るぐ価値

概要

「1990年にツインファミコンのディスクシステム（スーパーファミコンは同年11月発売予定）が発売され、メディア展開が行われていたら？」というありそうで無かった、当時のイベントを舞台に、胡散臭い架空のレトロゲーム販売キャンペーンのキャラクターデザイン」

コピーライティング 「地獄まで狂い咲け、鋼鉄の花」

テーマ

「エコな行動をしているつもりの人」と「環境破壊をしているように見える人」

どちらが本当に持続可能な未来を考えているのか？生み出す利点と、見落とされがちな負の側面とどちらが、人間の幸福につながるのか？それとも、伝統的な価値を失うことで不幸を生むか？

ゲーム内容 ジャンル

関西を舞台にしたアドベンチャー／人間ドラマを盛り込んだ小説仕立てのストーリー

20世紀EXPO'90花博（鶴見緑地公園）で数々の人々が抱える悩み矛盾を、花を通して解決させるストーリー。

主人公は基本、花を栽培せず（ハーブは植える）、その知識や情報を語る批評家としての役割。来場者に「役に立つ植物と、鑑賞するだけの植物の違い」等、問いかける。

主人公の本来の目的は「七色の花」を見つける事。

公害で色を失った 川、空に「七色の花」を咲かせる事で街に色を取り戻せると考えている。

ジャンル

関西を舞台にしたアドベンチャー／人間ドラマを盛り込んだ小説仕立てのストーリー展開

考察

1990年—この年は、バブル経済の華やかな表層の奥で、いよいよ崩壊の影が忍び寄る転換期であった。経済成長の勢いの中で、日本人がかつて誇っていた「心の豊かさ」や「人々の情熱」は、急速に薄れていった。どこか儚く、しかし痛みを伴うその喪失は、同時に多様な価値観や対立軸が交錯する象徴的な時代の姿を映し出していた。

この時代背景の中で、花博（EXPO'90）は単なる展示会場という枠を超えた、社会の矛盾や内在する対比を映す大きな装置として機能していた。花博のテーマである「自然と人間との共生」は、対比を鮮烈に浮かび上がらせるテーマの舞台となった。

1990年は、ただの年ではなく、文化・社会の大転換点として、未来への道筋を模索する重要なターニングポイントであった。

そして、2025年に開催される大阪万博とも重なるこの歴史的舞台は、過去の記憶と現代の新たな挑戦とがリンクする瞬間でもある。

私たちにとっての華やかさと儚さの時代「伝統と革新」、「進歩と調和」、そして「痛みと再生」の両面を見つめ直す絶好の機会となるだろう。

具体的には、花博のテーマである『自然と人間との共生』を背景に

「エコの理想とエコの現実」の対立、「伝統と革新」

「自然と科学」、「進歩と調和」といった対比を、サブカルチャーの「偏見と受容」、そして公害の「痛みと再生」を花博という舞台を通じて、環境問題だけでなく文化的・社会的な課題をも浮かび上がらせる。

舞台は、1990年、大阪・花の万博（EXPO'90）。

EXPO'70で母がかつて歩いた「思想の跡地」を、自らの足で踏みしめていく。テーマは「エコ」と「エロ」。そして、「癒し」と「記憶」と「使い捨て」の構造的関係。EXPOコンパニオンの制服を着てバイトしながら、咳をこらえて笑う少女。七色の花を探す彼女は、咲かされた未来にノーを言えるか。

主人公は涼香の娘、認定公害病の 日外陽（あぐい・ひなた）。

彼女は花占いを信じる、ハーブと哲学の少女。

【「潤いのある21世紀」を夢見て、緑を伐り拓き、鉄で土をならし、花を植える―それが、

1990年『自然と人間との共生』。でもな、なんでやろ…心のどこかが、うずくんよ。うちの願いは、ただ一つ。公害で色を失った街に、ほんまの『七色の花』を咲かせたいだけやのに―嫌いやア…

この「ええ感じ」の未来。】

祖父母から母への継承のレザージャケットを羽織り、ハーブノートを片手に「七色の花」を探す。

ハーブとドラッグ。公害と医療。エコと自己責任。

癒しが産業化されるとき、「病める者」は再び取り残される。EXPO会場で「花」はもう記号でしかなく、少女の咳は医療にも行政にも届かない。社会はバブルの光の中で、癒し、自然、エコロジーを消費アイコンに変えていた。世界は

「癒し」や「エコ」の名前で、また新しい未来を飾ろうとしていた。

人工の花、バイオの花、マーケティングされた「ナナイロノハナ」。

企画：(株)マハーポーシャ 協力：第4サティアン(MAT) 監修：(宗)AUM

ツインファミコン対応ディスクカード1990年3/1発売予定 価格未定(消費税 3%別)開発・発売元：シャープ

広告概要

メディアミックス戦略・目的 ディスクシステムの普及促進ツインファミコンディスクシステムのPR。漫画・イラスト・雑誌・ラジオ・音楽・アニメといった多方面のメディア展開を行う計画―

掲載予定メディア

1. 漫画・イラスト・アニメ情報誌
 - ・ ファンロード (ラポート社) ↓アニメ・イラスト 投稿系「読者コーナー：ひなたん通信」
 - ・ 月刊OUT (みのり書房) ↓アニメ・パロディ中心「特集：日外陽のハーブノートの秘密」
 - ・ ガロ (青林堂) ↓サブカル・アングラ系漫画「マンガ：20世紀エコテック少女 episode III」
2. ゲーム・エンタメ雑誌・ファミコン通信 (ASCII出版) 週間発行のゲーム誌「七色の花栽培マニュアル」
 - ・ ぴあ関西版 (ぴあ社) ↓関西のエンタメ情報誌「特集：春休みに行こう大阪花博」
3. ラノベ・文芸
 - ・ MOE文庫スイートハート (MOE出版) ↓女性向け・少女小説系「小説：20世紀エコテック少女 ~ Reloaded ~」
4. ラジオ番組とのコラボ
 - ・ FM802 「FRIDAY AMUSIC ISLANDS」 (開局 1周年記念花博パワープレイ) J・POP・ロック系
 - ・ ラジオ関西「青春ラジメニア」(アニソン番組)「一度も採用されたことのない人特集」
5. 音楽CD・OVA制作
 - 花博テーマソングやゲーム主題歌を流す計画があるが、CD販売やOVA制作会社は未定。

キャラクタービジュアル

基本情報

名前：日外陽（あぐいひなた） ・ 性別：女性

生年月日：1971年 4月19日 ・ 血液型：A型 ・ 星座：牡羊座 ・ 身長：150cm

【花個紋】向う锚草 【留意ことば】底力

粘り強くチャレンジ精神に溢れた人。ここぞという時に本領を発揮する。常に自分を成長させよう、変化させようと努力している賜物です。縁の下の力持ち的な存在で、周囲から頼りにされている人です。

好きな花 ・ 锚草 ・ チコリー ・ アロエ

愛読書 ・ 島崎藤村『破戒』 ・ 公書スタディー ・ 暮らしを彩る花図鑑

好きな食べ物 ・ マハラジャはちみつトースト ・ うまかろう安かろう亭アルマゲ井 ・ 青森そばめし

好きなアニメ ・ キテレッツ大百科 ・ YAWARAI ・ 魔法の天使クリイミーマミ

好きな漫画 ・ ハートカクテル ・ まじかる☆タルるートくん ・ DEAR BOYS

好きなTV番組 ・ ナイトライダー ・ 天才・たけしの元気が出るテレビ!! ・ ねるとん紅鯨団

マイブーム ・ レンタルビデオで「ツインピークス」を観る

好きな歌手 ・ 中森明菜 ・ 谷村有美 ・ MC Hammer ・ Janet Jackson

好きな映画 ・ ソンビ ・ サンゲリア ・ 釣りバカ日誌

好きな雑誌 ・ CUTIE ・ Olive ・ まんがタイムス

カラオケでよく歌う曲 ・ 淋しい熱帯魚 (winx) ・ 虹の都へ (高野寛) ・ LOVEさりげなく (太田貴子)

好きなゲーム ・ ゲームボーイ関連 ・ 平安京エイリアン ・ テトリス ・ 魔界塔士 Sa・Ga

趣味 ・ 自宅菜園 ・ ガーデニング ↓ 花は光化学スモッグの影響ですぐ枯れてしまうため、ハーブの栽培に取り組んでいる

IC、IS時代はバスケット

母と妹と同居 妹15歳、弟1歳 弟は祖父母宅で皮膚炎の療養中

祖父 546-52兵庫県長田区5番町 95-117 (革製品工場 注:同和地域未指定地区)

母子家庭 父(アメリカ人)/EXPO70:アメリカ館に従事(肺気腫で死去)

公立大阪園芸大学 造園農学部2回生

バイト先 大阪生花卸売市場 (後の大阪鶴見フラワーセンター)

特徴的な話方 花、草、ハーブには「さん」付け、人の名前や両親には「さん」付け無し 関西弁

宝物 家族、エアジョーダンII、レザージャケット(祖父母制作↓母↓贈与)

愛称あだな ルンルン、あーちゃん、ひなポン

愛車 90'FLSTF HONDAシビック56i 家族で移動の場合嫌々運転

特技 花占い、花飾、アロマ(花香)、ハーブ(実用的植物)にも詳しく哲学的なうんちく語る。

国家資格 普通自動車免許、自動二輪限定解除、フラワー装飾技能士(NFD)1級

認定資格 メディカルハーブセラピスト(JDAP)ハーブプロフェッショナル(PAH)アロマセラピー

プロフェッショナル(JSADA)アーティシャルフラワー(JFLA)

住所 郵便番号 42219-8181 兵庫県尼崎市杭瀬団地 E-92-2-56306 電話番号: 1019-5969-28510

(今行く極楽浄土)

持病 有 慢性気管支炎 (認定公害病第一種地域)

思想的立ち位置

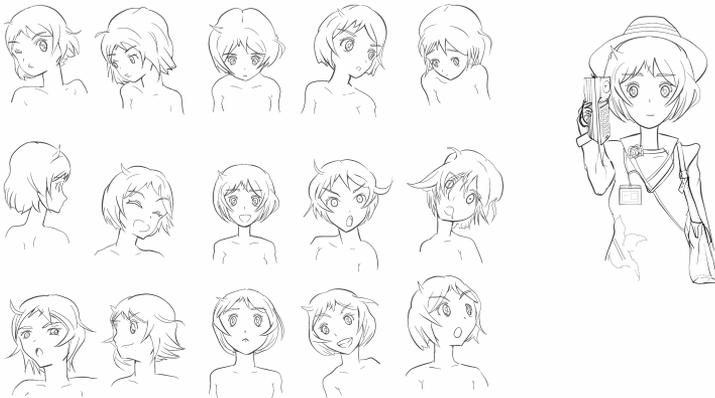
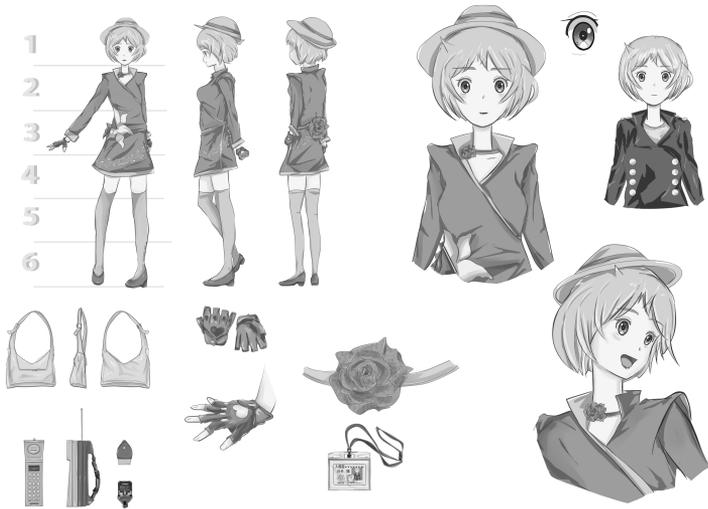
- ・ 「観念・思想志向×反主流」
『20世紀エコテック少女』episode V ～Reloaded～¹⁴⁾、
エコロジィ・公害・ジェンダー・伝統批判といったテーマを、
レトロゲーム風の皮をかぶせて描くというポスト・サブカルチャー批評的作品です。
- ・ 『ガロ』的なアングラ批評性+ツインファミコン/EXPOメディアミックスの胡散臭さが強く、
「表と裏」「正義と欺瞞」「希望とあきらめ」の二重構造が軸。

メディア展開とのギャップ

1989年ー 今、あの連載の続きが家庭用ゲーム企画として始まる。

- ・ ツインファミコン販促×反消費主義ストーリーという構造は、「売るための虚構」と
「語るための真実」がせめぎ合う構造批評になっている。
- ・ OVA・CD・ラジオ展開は、むしろ「体制的メディアの滑稽さ」を際立たせる演出装置。

キービジュアル 日外 陽



― 日外陽 1990年 (メインホール'90)

CHAPTER 4 フラワー&グリーン (花の輪) 音頭

〈未来のスカート丈〉

― 制服の丈は、未来の長さ? ―



街のエリア・メインホール。 「グリーンファッションステージ」

【PAGE 1 : プロローグ】

1. ステージ看板：「21世紀の制服は、こうなる！」
(協賛企業：セシール、オンワード、ワコール、ポーラ、ミズノ他)
2. モデル登場：膝上15cmの未来制服に観客ざわつく。
3. 司会：「本日も紹介するのは、24時間タカエマスカなビジネスウーマンにも対応した、未来型ユニフォームです！」
4. 観客のオッサンたち：「おぉ～ええやん」「ミライってえらいな～」
5. 陽：遠巻きに見て苦笑い。
6. 陽モノローグ：「丈が短いんやなくて、価値観が古いままなんちゃう？」
7. ステージ照明が反射して、陽の顔に強く当たるカット。

【PAGE 2 控室と“丈”の話】

1. 控室で陽が別のコンパニオン（佐知子）と休憩中。

2. 佐知子..

「なあ…未来の制服って、こんなに脚出すんかな？」

3. 陽..

「丈、勝手に未来にされとんで…」

4. 佐知子..

「でも、こういうの似合わないアカンのかなって…思たら…」

佐知子が悩んだあと、ポツリ..

「…うちら、オバタリアン予備軍って言われるんかなあ…」

5. 陽、アロマオイルをティッシュに垂らす

6. 陽..

「深呼吸しよ。鎮静化と同時に活性化してくれる作用あるアロマのナツメグさんや。

香りは、自分を取り戻す助けをしてくれんネン」

「ラテン語で意味は息をする、香り漂う」

7. 佐知子、少し笑顔..

「……ありがと、ルンルン」

1. 二人で制服資料展示へ移動。
2. 昭和30年代…長めのスカートと白ブラウス（百貨店制服）
3. 昭和45年…紺のミニスカートワンピースに幅広の赤いベルト（航空会社制服）
4. 陽…
5. 「丈は変わっても、中身は変わってへんこと多いで」
佐知子…
6. 「なんか、未来って、どんどん脚出せ_てって言うってくる感じ」
陽…
7. 「うちは、心の丈_も出_さしたいなあ」
展示の中に、涼香（母）のかつてのホステス制服展示を見つける。

【PAGE 4 制服という仮装】

1. 陽、expo70の展示に見入る（1970年・日本館制服）
2. 陽モノローグ…
「未来を見せる制服やったんやな……でも、ほんまは沈黙の仮面や」
3. フラッシュバック…涼香が紙コップを拾っていた写真
4. 陽のモノローグ…
「着せられた制服には、語られへん痛みが、ようけ、入ってる」
5. 別の来場者（老婦人）…
「その人…昔、私、会ったことある気がするのニッポンの顔って言われた」
6. 陽…
「え…この制服の人、知ってるん？」
7. 老婦人…
「1970年の万博、夕暮れ…生活産業館の裏で、紙くず拾ってたの日本館の制服で。
きれいで、でも…すごく、哀しそうやった」

【PAGE 5 ハーブと花の記憶】

1. 陽がそっとハーブティーを淹れて差し出す。

2. 陽..

「マジョラムさんとネトルさん。純愛や幸福を象徴するハーブ。

よう効くんや。優しすぎる人に、ぴったりや」

3. 老婦人..

「……あの人、あたしの未来に、ちょっと花咲かせてくれたんよ」

4. モノローグ..

「花って、咲いてるとこしか見られへん。でも、咲かせようとした人のことは、

忘れられへん」

5. 展示ブースの花装飾と制服の刺繍が重なる構図。

6. 陽..

「制服って、着せられる花_さや。せやけど咲き方は、自分で決めてええと思うねん」

7. 老婦人が静かにうなづく。

1. ステージに戻る陽と佐知子。
2. 今度のモデルは環境対応型スマート制服。
↓ピタピタスーツ+透湿素材+静電気カット機能
3. 佐知子..
「ルンルン…これって…未来？」
4. 陽..
「ええ感じの未来、やなあ…ほんまに」
5. 陽モノローグ..
「丈だけやなく、機能や色まで、好ましい女に寄せられていく」
6. 子ども..
「おかあさん、あれ着るの？」
- 母..
「着ないよ、お姉さんのお仕事服よ」
7. 陽（ナレーション）..
「お姉さんでいることが、どれだけ苦しいか、知ってるんやろか…」

【PAGE 7 制服の再デザイン】

1. ステージ終了後、陽がノートに『花モチーフの未来制服』をスケッチ
↓花びらのようなフリル、野草の刺繍、丈バラバラ
2. 陽..
「丈は、未来の長さやなく、いまの私や」
3. コンパニオン全員で記念写真、陽が中央に
4. フィルムに映るのは、丈より笑顔
5. モノローグ..
「咲かされる制服やない。咲かせたい未来を着ただけや」
6. 芝生の花に視線を向ける陽
7. 陽..「丈なんて、咲いた花の長さくらいや。
せやけど、どんな根張ってたかは、誰にも見えへん」

1. 陽、制服を脱ぎ、レザージャケットに着替える
2. 少女来場者..
「あのお姉ちゃん、向日葵みたいやった〜！」
3. 母..
「そうやね、笑って咲いてたねえ」
4. 陽（聞いて苦笑い）..
「咲かされたんやなくて、自分で陽向いて咲く。それが向日葵さんや」
5. 少女..
「お姉ちゃん、お花みたいやったで！」
6. 陽が微笑んで手を振る

「未来のスカート丈」 — 制服の丈は、未来の長さ？ —

「丈なんて、花の咲き方といっしょや。見せ方より、咲き方やで」

「24時間タタカエんでも、花は自然と咲く。ほんまに、強いもんはな」

「咲く丈は、自分で決めてもええやんか。」

一日外陽 1990年 (花博写真美術館)

CHAPTER 3 ほんまやね

ネガ記憶とポラロイド 美しい人はより美しく…写ルンです

— 写真は「香りの記憶」を引き出す —



【PAGE 1 プロローグー花博・街のエリア】

1. 外観カット（花博写真美術館）

37メートルのシンボルタワーと世界最大のポラロイドカメラ。

テーマは「美しい地球」、電子フォトフォトプラザで写真加工（背景合成）も出来る。

2. 陽のモノローグ「うちは、写真^エって香り^ニに似てると思うんや」

3. 陽、館内でカメラを借りる（キヤノンAE1）

↓ 館員：「フィルムは36枚撮りでお願いしますね」

4. 展示案内：Photoプラザ「EXPO70の裏側」「水俣の記録」

↓ 看板の横を陽がゆっくり歩いていく。

5. 展示室：照明の落ちた空間／静かに歩く陽

6. フォトプラザスペース、1枚の写真で足が止まる：白黒・EXPO裏手通路の写真

7. 陽のセリフ（心の声）「あれ……この背中……」

【PAGE 2 EXPO'70生活産業館の涼香】

1. 写真の中… 日本館のコンパニオン制服姿の涼香が紙コップを拾っている
↓ 日本館のホステス衣装、生活産業館バックヤード
2. 涼香の指先が泥にまみれ
3. 写真のキャプション…「救護係・医師の記録（1970）」
4. 陽の顔アップ…
「おかあはん…そんなところで…」
5. 回想…陽が草むらでラベンダーに手を伸ばす場面
6. 陽のモノローグ…
「花が咲いてへんところに、ほんまの生活があるんやな」
7. ガラスの外にラベンダーの香り——香りと写真がつながる

【PAGE 3 水俣の涼香 (1969年)】

1. 写真…水俣病の診療所で患者を抱える若き涼香
2. 医師の助手として器具を手渡す涼香／汗だくで
3. 陽…
「…これも、ほんまに？ おかあはんかいな…」
4. 写真に映る涼香の泣きそうな目のアップ
5. 陽、ハープ瓶取り出す (クラリセージ、ローズマリー)
6. 陽のセリフ…
「クラリセージさんの名は、ラテン語で「明るい」「清浄な」の意味があつて—」
「この香り、抗ストレス効果があつて女性のホルモンバランスを整えるには一番や」
7. 写真に向かつて手を当てようとする陽の手。届かない距離。

【PAGE 4 展示に重なる自分の影】

1. 陽、展示写真の前に立ち尽くす
2. 写真に重なる陽の影——「母の位置」に自分がある
3. 陽..「おかあはん、語らへんことで、ぜんぶ語っとったんやな..」
4. 展示ガラスの下に小さなアロマ瓶をそっと置く
44. 陽が別の展示コーナーで見つける一枚の風景写真
↓グレーと光が交錯するモノクロの大自然（ヨセミテ溪谷風）
45. キャプションに“Ansel Adams, 1942”の文字
46. 陽、目を細めて見つめながら独り言
「...なんやろ、静かやのに、ものすごい怒りが写ってる気がする」
「自然て、沈黙やなくて、記憶の声なやな」
5. 陽のモノローグ..「アンセル・アダムスはん、自然をただ美しいって撮ったんやない。
人間が奪ったものと、残された静けさを撮ってたんや..」
6. 陽の心の声、香りに重ねる..「写真が光の記録やったら、アロマは空気の記憶や」
7. 観客の少女がその香りに気づく。
71. 少女..「なんかこの写真..いい匂いする..」
8. 陽（モノローグ）..「うちは香り..で続きを語る」

【PAGE 5 香りと記憶のつながり】

1. 陽が語りかける..

「写真はな、過去の光_きや。でも香りは、今_{いま}に届くんよ」

2. 彼女の手にハーブティートノート

3. 陽..

「ローズマリーさんは記憶の強化。けど過去に効くんは香り」

4. 展示写真の中の「地面を這う手」と、陽の手が重なる構図

5. 陽のセリフ..

「痛みも怒りも、咲かせ直せるんや。香りで」

6. 少女が鼻をすん…と鳴らして

「なんか懐かしい香りや…」

7. 陽..

「それが、ほんまの未来を咲かせる種やと思うで」

【PAGE 6 ネガの裏側】

1. 展示されていた写真裏のネガ…明るく写っていた写真の「裏面」
2. 陽がネガを透かして見る。裏には誰も知らん涙の記録
3. ナレーション…「語られなかった未来の断面が、ここにある。」
4. 陽のセリフ…
「見えへんかっただけで、咲いてたんやな」
5. 回想…涼香が誰もいないバックヤードでゴミを拾うカット再び
6. 陽がそれらを心の中で抱きしめるように
7. モノローグ…

「これは、沈黙の記録や。咳と、香りと、ネガの向こうの…」

【PAGE 7 未来へ咲く記憶】

1. 陽、美術館を出て明るい日差しの中に出る
2. 屋外ポラロイド撮影スペース、ポラロイドで少女に撮ってあげる陽
3. 少女…「お姉ちゃん、持つてるカメラ、フィルムいるン？古いやつやんな？」
4. 陽（微笑）…「古いんやなくて、焼き直しやねん」
5. ポラロイドフィルムから浮かぶ像…少女と草原
 少女…「これ…草原？うち、こんなところ行ってへんけど…」
 陽…「それ、未来のロケ地、かもしれないなあ」
6. ポラロイドフィルム越しに写る、七色じゃない雑草たち
 「あの子の後ろ、たしかに草むらもあつたけど…フィルムの色、ちょっと滲んどる。
 ……もしかして、香りがレンズ通して草原に変えたんかもな」
7. 「撮った瞬間、風が吹いた。光も跳ねた。せやけど——
 ほんまは、あの子の未来が写っただけかもしれへん…知らんけど」
8. 陽（ナレーション）…
 「咲かされた未来はいらん。うちは、撮りなおす。自分のレンズで」

【PAGE 8 エピソード】

1. 展示室に残された小瓶のアロマに寄るカット
2. モノクロの写真の中に、小さく香る色_ニが差す
3. 少女が帰り際に呟く「未来って、匂いするんかなあ…」
4. 陽がハーブノートに書き込む…
「ネガと記憶、香りのアーカイブ」
5. 陽：「うちは、沈黙_ヲを育ててるだけやで。咲くまで、待つんよ」
6. 展示の隅に写る一枚の植物写真——雑草が光を浴びてる
7. ラストカット…陽が再びカメラを構えるシルエット
8. タイトル…『…そうでない人はそれなりに写ルンです』

——香り_ヲで語る、過去の痛みと未来の芽吹き。



一日外陽 1990年 (水の館)

CHAPTER 2 約束

あの子が咲かなかった理由

【PAGE 1 咲かん花との出会い】ペルー共和国ナショナルデー 6 / 28

コマ 1 「山のエリア・国際展示水の館」。ペルー共和国展示の巨大植物——プヤ・ライモンデイ。

陽（モノローグ）..

「……この花、百年に一度だけ咲くんやって」

コマ 2 《解説パネル》..ペルー原産／開花後に枯死する植物。開花まで80〜100年。

陽（モノローグ）..

「咲いたら、終わり。咲かんかったら、誰にも気づかれへん」

コマ 3 閉じたままのつぼみを見つめる陽。

コマ 4 陽の顔がガラスに映る。自分の姿を重ねるように。

陽（モノローグ）..

「……うちも、咲かんまま終わったら、どうなるんやろ..」

コマ 5 咳き込む陽。

効果音..ゴホッ..

コマ 6 歩き出す。マダガスカル民主共和国の小さな看板が目に入る——「未来の花壇」。

【PAGE 2 白い花と「咲いてしまった命」】

コマ 1 「未来の花壇」整然と並ぶ花の端っこに、名札のない白い小花。

陽（モノローグ）…「…なんでこの子だけ、名もつけてもらわれへんのやろか」

コマ 2 しゃがみこむ陽。花の前に手を伸ばす。

陽…「ここ、展示ちゃうのにな…それでも咲いてしもたんやな」

コマ 3 咳をこらえながら花を見る。

陽（モノローグ）…「咲いてしもた命…なんやろな、それって」

コマ 4 背後から声。

佐知子（声）…

「その花、マダガスカル民主共和国の名簿にも載ってへんで。たぶん、混ぜった苗や」

コマ 5 振り返る陽。佐知子が同じ制服で立っている。

陽…

「佐知子…来とったん？」

コマ 6

佐知子…

「香席の係や。風よけ係。涼しい仕事やろ？」

コマ 7 ふたり並んで花を見る。風に白い花びらが揺れる。

【PAGE 3 香りを聞くと(うんこ)】

コマ 1

陽…「……この子、咲いたのに、誰にも見られてへん」

コマ 2

佐知子…「香道ではな、香りは聞くともんやって言うんよ」

陽…「聞く？音っちゃうのに？」

コマ 3

佐知子…「聞香(もんこう)……。目に見えへん残り香を、心で聞く」

コマ 4

陽(モノログ)…「見えへんもん……聞く。触れんでも感じるんやな」

コマ 5

白い花に手を伸ばす陽。
擬音…ふわっ

コマ 6

香の煙が風に流れていく。

コマ 7

陽の目線、白い花の奥に過去の誰かを見るような描写。

【PAGE 4 名のある香木、名のない花】

コマ 1

陽…「ココでは名前のある花しか、残らんのやろか」

コマ 2

佐知子…「皇室で蘭奢待（らんじやたい）って香木があるねん。昔から、削った記録が残っとる」

コマ 3

佐知子…「それって誰が香りに触れたかを残したいからやろな」

コマ 4

陽（小さく）…「うちは…誰にも触れられへんかもな」

コマ 5

佐知子が、黙ってその言葉だけ受けとめている。

コマ 6

風が吹く。花が揺れる。

陽（モノローグ）…「…誰かのために咲いたんやなく、自分のために咲いたんかも」

コマ 7

陽の表情がすこしやわらぐ。

【PAGE 5 センターリー】

コマ 1 陽が草花を撫でながら語る。

陽…「センターリーさんって知ってる？ ハーブのひとつやねん」

コマ 2

陽…「周りの背丈に合わせて育つ。

大きな草があったら、背を伸ばさず。誰もおらんかったら、ちっちゃく咲く」

コマ 3

陽…「荒地でも咲く。他の草が育たへん場所でも——咲ける子やねん」

コマ 4

佐知子…「それって、ルンルンやな」

コマ 5

陽（小さく）…「そやろか……」

コマ 6 風が吹き抜ける。ふたりの制服が揺れる。

コマ 7 白い花に日が当たると。

【PAGE 6 母との記憶】

コマ 1 (回想)

お母はん(涼香) .. 「名前のない草にも、誰かの記憶があるんやで」

コマ 2 (幼い陽と庭) ベランダで無名の草を眺める陽と母。

コマ 3 (現在)

陽.. 「お母はん、あの頃、よう言うってたな。」

「名前^{なまえ}のついてへん花ほど、見つけてあげなアカンねんで。って」

コマ 4 ハーブノートを開く陽

コマ 5 ——描かず、閉じる。

陽.. 「この子、描かんでも覚えとる。名前なくても、うちは忘れへん」

コマ 6 静かに白い花に手を合わせる陽。

コマ 7 その背中を見守る佐知子。

【PAGE 7 咲く意味】

コマ 1

佐知子…「見られへんかった花も、咲いたことには変わりないよ」

コマ 2

陽…「咲かんかった子も、咲いた子も——誰にも比べられへん存在なんかもしれんなア」

コマ 3

通りがかる子ども…

「この花、名前なにー？」

コマ 4

陽が後ろ向きに、笑って言う。

陽…「ひみつ。けど、うちは知ってるで」

コマ 5 花が揺れる。

コマ 6 香の煙が再び流れる。

コマ 7 ふたりの後ろ姿。初夏の風が静かに吹く。

【PAGE 8 結び】

コマ1 (七色の花・接写)

風にたなびく無名の白い花――

光の描写で七色になる花びら。

コマ 2

モノローグ..

「咲かんかった理由――

ほんまは、咲いたことを聞く人がおらんかっただけなんや」

コマ 3

テロップ.. CHAPTER 2..あの子が咲かなかった理由

■ episode V 〈Reloaded〉 『揺らぐ花、揺らぐ価値』 その他 キャラクター

山田 佐知子（やまだ さちこ） 身体化されたエコ思想の代弁者

呼び名 サッチャーン、サッチー、ヤマダかってないさちこ

自転車 ツノダ コロンビア（マウンテンバイク）カスタム

家系 香道の家元の娘（兄が後継者）

立場 陽・舞と同じコンパニオン同期。香りの余白、内藤舞とは思想的対立者だが、敬意はある

特徴 家元の育ち、形式より体感、静より動を好む

台詞 「香りは止めるもんやなく、流すもんやねん」 「止まっている香りより走ってる香りが好きやねん」

「抹茶のアメちゃん、あげよか？」

生年月日 … 1970/09/14（乙女座） 血液 O型 身長 155cm/48kg 京都府宇治市出身

好きなブランド … 梅栄堂 林龍昇堂 松栄堂

愛読書 … 源氏物語 古事記 花とゆめ

腕時計 … TIMEX CAMPER（手巻き／NATOバンド）

好きなアイドル … 森高千里 工藤静香 中山美穂

好きなドラマ … 抱きしめたい！ ニューヨーク恋物語 教師びんびん物語

好きな漫画 … ガラスの仮面 とぎめきトゥナイト 風の谷のナウシカ

座右の銘 … 「香十徳（こうじゅつとく）」

服装

.. 花博制服（陽と同じ）、普段は地味で整った私服。（香道は着物）

動きやすいが品のある服を好む。（支給バックではない、シオルダーバックはでかい）

所作

.. 香を包むときは常に和紙使用。手の動きに迷いがなく、静かな所作を重んじる。

思想

.. 「残り香」や「目に見えない価値」に重きを置く。再現より記憶を重んじる。

話し方

..（関西弁+京都弁）、ゆっくりとした口調。京都弁のやや皮肉っぽさもあるが、優しい。

カバンに和紙包みで香を携帯。

陽を「ルンルン」と呼ぶ（七色の花を探している⇨花の子ルンルン）

香道の継承者として言葉、数値、商品にもならない「余白の価値」を持っている

⇨資本主義、テクノロジーにも奪えない身体の中の未来を信じている。

不可視の価値。揺らぎの観測者であり聞香の仲介者でもある。「答えを持たないエコ」を体幹として持っている女

キービジュアル 山田 佐知子



内藤舞（ないとう まい） 香り資本主義の象徴（次巻以降登場）

呼び名 マイ／ナイトウさん／お嬢様

車 ……ポンティアック・ファイヤーバード・トランザム（ナイト200カスタム KITT）

所属 ……ナイトウ財団「F.L.A.G.」ナイト館館長（財団によって花博にナナイロノハナを展示）

立場 ……陽・佐知子と同じコンパニオン同期。だがひとりだけ資本の力で特別粹っぽい空気をまとう。

特徴 ……クールで合理的、だが少し寂しげな表情を見せる時もある。

「未来」のパッケージングに関わる家系のプレッシャーを抱える。

「七色の花」に思想や哲学ではなく結果を求めるタイプ。

- ・ EXPO'90ナイト館館長（開幕日に展示が間に合わなかった）、全身黒のハイブランド、ビジョナリー
- ・ 話し方…一貫して標準語
- ・ 所属…内藤財団（展示名「F.L.A.G. Nana-Iro-Type04」として七色の花の人工栽培を行う）
- ・ 舞が登場すると陽は登場しない（＝陽は七色の花の人工栽培は知らない）

「七色の花」は1970年 EXPO'70で「未来の象徴」として展示されたが、企業ごと時代に埋もれた。それを舞たち内藤財団が企業買収・復刻して、1990年、ふたたび展示として蘇らせた――。

兵庫県出身。小学生時代に父母死去、その後、内藤財団の養女となり、16歳まで養父による性的虐待を受ける。財団の香化学研究部門だけが、養父より経営が切り離されていた為、そこが安全地帯であると思っている。

(その後、養父死去後、舞に財団の全権利相続)

舞の理想

- ・ 香りは記録されて初めて世界に残る。
- ・ 誰にでも届けるには、商品化が必要。
- ・ 歴史の敗者ではなく、「次の未来」の勝者になりたい。

生年月日 : 1965/6/6 (双子座) 血液 A型 身長 160cm/50kg

好きなブランド : シヤネル、ルイビトン、グッチ

好きな車 : GM,AM General,CHEVROLET

絵画 : ヒロヤマガタ、クリスチャン・リース・ラッセン、トーマス・マックナイト

好きな果物 : タ張ンメロン、ルビロマン、マンゴー (太陽のタマゴ)

好きな映画 : ストリートオブファイヤー、愛と青春の旅立ち、リーサル・ウェポン

好きな曲 : 真夜中のドア〜Stay With Me (松原みき) 夏のクラクション (稲垣潤一) Up And Down
(東北新幹線)

腕時計 : コムリンク (内藤財団製)

格言 : 野心の無い夢は、ガソリンの無い車のようなものだ。あなたはどこにも向かっていない

(アメリカの俳優、シーン・ハンプトン)

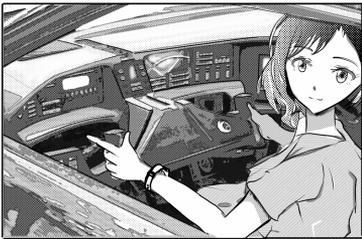
昔の偽りの希望を、平成財閥令嬢の資本が感動コンテンツとして再起動させる。時代と金と謎の科学力を

背負った女

次巻本編、「揺らぐ花、揺らぐ価値」にて

「人工の香り」vs「伝統の香」、「商業と記憶」vs「名と無名」の思想対立へと発展する

キービジュアル 内藤 舞



日外涼香（あぐい・すずか）※（米国籍取得後のEP4以降は Jason Suzuka）

「救えん命があるのは分かつてる。せやけど、見捨ててええ命なんか、どこにもあらへん」

生年月日 … 1946年6月27日（蟹座）

血液型 … B型

身長／体重 … 168cm／47kg

パワーストーン … トルマリン

出身 … 兵庫県神戸市長田区・同和地区（革製品工場経営）

職業 … 外科医（尼崎市・杭瀬の診療所勤務）

● 出自と思想の源泉

- ・ 戦後の高度経済成長期、兵庫県の商業都市 神戸の同和地区に生まれ育つ。
- ・ 表面的には「平等」がうたわれる社会の中で、見えない差別と抑圧を肌で感じながら成長。
- ・ 自らの名が差別の記号であることを悟りながら、それでも「名前を消さない」選択をしてきた。

● 医師としての選択と限界

- ・ 1968年、医師国家試験に合格。当時としては数少ない女性外科医となる。（EP1）
- ・ 大病院や研究機関ではなく、のちの公害指定地域 [1974（昭和49）施行] と呼ばれる・尼崎の最前線へ赴任。（EP2）
- ・ 医師としてのスキルだけでなく、「誰にとって命が診るに値する」とされるのか？ という社会の選別と対峙。（EP2）
- ・ 命に優先順位がある現実——診察台に乗せられなかった患者の声に耳を傾けてきた。（EP2）

● 思想軸（『20世紀エコテック少女』の原点）

- ・ 涼香は、「名前のない痛み」「記録に残らなかった命」「診断できなかった病」を見つめ続けた存在。
- ・ 科学は差別を癒せない。国家の言う『未来』は、誰かの現在を踏み台にしている。
- ・ 「命を救う」ことと、「命が生きられる社会」を作ることの間には、深い断絶があると痛感。
- ・ その思想は、後に娘・陽へと継承される。

● 性格・価値観

- ・ 極めて完璧主義。だが理想主義者ではない。
- ・ 差別も矛盾もすぐには消えないと知りながら、現場で踏みとどまり続ける粘り強さを持つ。
- ・ 「ええかげんな中立」がいちばん罪深い」と考えるタイプ。
- ・ 自分の沈黙が誰かを見殺しにしたかもしれない過去を忘れない。

● 趣味・日常

- ・ 好きな音楽…ビートルズ／シカゴ／キャロル・キング
- ・ 食の嗜好…そばめし／たこ焼き／うどんなど、^①労働者の味。
- ・ 通勤…1970年に出会った夫の形見である1968年製「E」に乗り、父母が制作したレザージャケットで通勤
- ・ ↓【陽に継承後はANJ-3Aフライジャケット。左胸には「JASON」のネームパッチ。】（EP4〜）

● 作品内での役割

- ・ Episode 1〜3ではEPO70の『表』と『裏』を生きる日本館ホステス+医師、陽の母の思想として登場。
- ・ 国家・科学・ジェンダー・差別―「ええ感じの未来」に仕掛けられた虚構を見抜いていく。
- ・ Episode IV以降では、かつて沈黙した過去を問い直す者として、若い世代へ思想を継承する存在となる。

20世紀エコテック少女

Episode III 『めくらの国からこんにちは』

【作品構成：episode III・I・II】

構造レベル	表層	中層	深層
【近代化の代償】	万博の華やかさ	労働・環境被害	「未来」の定義そのもの
【医療と制度】	外科医としての葛	医学の中立性の喪失	“命”の価値を誰が決めるのか
【ジェンダーと階	女性医師の孤独	差別構造に加担する制	抵抗としての“生”

これは、「国家が描いた未来」に、少女が違和感を抱く物語。

万博という祝祭空間で語られる理想と、

描かれなかった現実とのあいだに、涼香は立ち尽くす。

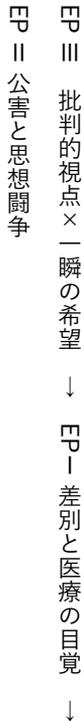
Episode IIIは、「未来の嘘」に気づいてしまった少女が、声にできない怒りと向き合う章である。

だがその沈黙こそが、のちに娘・陽が語る「香り」へと繋がっていく。

拒絶と再接続――。

『20世紀エコテック少女』の思想の核心は、ここから始まる。

【Episode III、I、II の思想変革順序】



70年代の社会問題を部落差別、女性軽視される医師として

1973～78年『解放新聞（大阪版）』にて連載されたという設定の記録文学作品。「部落解放同盟」協力のもと、フィクションの形式で実際の差別と国家イベントの矛盾を告発。思想を「万博＝博覧会」という可視化装置に翻訳。読者は女性の視点から、国家・公害・差別・経済・家族・倫理・幸福を巡る思想旅に入る。

1970年の大阪万博。

その華やかな記憶の下には、誰もが口を閉ざした裏側があった。原子力、ホステス、人工庭園、都市開発、公害、そして差別。

パピリオンひとつひとつを「社会矛盾の断面」として記録した作品で、主人公は

「×パピリオン日本館ホステスで国家の顔にされた外科医の女性・日外涼香（あぐいすずか）。

【未来は明るいです。そう言えって言われたんよ、日本館の制服を着て。

でもな、私の診た子どもたちは、誰一人、青空の空気吸えへんかった】

……差別と管理の構造のなかで、未来の嘘と向き合った。

共産党機関誌との路線対立、露骨な官製イベント批判。連載は途中で打ち切れ、単行本化は見送られる。ただし、原稿は残った。

国家が作った未来、見えなくされた暮らし。

花が「管理されるもの」として扱われた起点で母の思想と痛みが土になる。

【考 察… テーマと対立構造】

■ 近代化と犠牲

EXPO'70は「科学」「技術」「未来」といった美名のもとに構築されたが、その裏では、下層労働者の排除、部落差別、公害の被害者といった見えない存在が黙殺されていた。

都市の光の陰に隠れた無数の影が、この連載の真の主役である。

■ 医学と人権

医師という職業が持つはずの中立性は、国家や制度の都合によって簡単に歪められる。

「生かす医療」ではなく、「生きさせる社会」こそが必要なのだということを、涼香は現場で学んでいく。

これらの対立は、1970年という理想と欺瞞のはざままで、涼香が見たもうひとつの未来を浮き彫りにする。彼女が万博で出会い、悩み、抱え続けたものは、のちに生まれる娘・日外陽の思想と行動に形を変えて受け継がれていく。

そして、EXPO'70で展示され涼香が見た七色の花は、ただの実験植物ではなく、母から娘へと託された「希望と疑問の象徴」となる。

■ 現実突きつけられる壁

「部落の女医？患者が怖がるぞ」と上司に言われる。同僚医師からは「男の指示がなければ動けない女」扱い。

EXPO日本館では、「日本の顔」としてのホステスだが、控室では「よく受かったな、あの名字で」と陰口。万博協会から、セクハラやパワハラを受けても、「ホテ子のくせに、ありがたく働かせてもらえ」扱い。

医局から、万博反対派の負傷学生を治療したことで非難され、医師としての理知と正義感、差別や偏見のない医療の中立性を信じた自分。しかし個人の尊厳を削られるような現実とのギャップ。

表向きは日本館のコンパニオンとして微笑みながら、裏では差別と欺瞞の現場を目撃するダブルスタンダードな社会。

「日本館ホステス＝日本の象徴」として前に立たされながら、控え室ではレッテル貼られ、使い捨てられる。

EXPO70という夢の未来の裏で、差別・暴力・格差に晒された一人の女性。

「うちは医者や…でもこの国は、女で、部落出身の、黙って働くホステスの方が都合ええんやろ…」

そんな未来のどこに、ほんまの進歩と調和がある？」

■ 公害病・都市開発と医療現場の矛盾

- ・ パビリオン裏でのセクハラや使い捨てのような扱いに憤りを感じつつ、医師としても会場内の救護活動に従事。
- ・ 差別や偏見を抱える来場者が集まる中、企業プロパガンダの舞台裏では万博労働者たちの過酷な環境と国策の「国の夢」にすぎり歓喜する群衆の矛盾にさらされる。

注) 1970年当時は外国人に国内で会う事は少なく、海外旅行自由化からまだ6年しか経過していない

【episode IIIの構造的意義】

『20世紀エコテック少女』における episode III は、物語全体の思想的転回点となる章です。

涼香（母：ep III）の視点は「国家」「制度」「差別」の批評で強烈ですが、陽（娘：ep V）の視点は「身体」「記憶」「自然」への再接続という、読者の「今」と地続きな感覚があります。

それは単なる EXPOSITION の裏側を描いた記録ではなく、

「国家が描いた未来図に、ひとりの少女が静かに抗う」という、極めて繊細かつ根源的なドラマが描かれています。

この章の主人公・涼香は、部落差別や家庭環境による社会的周縁の中で育った人物です。

彼女は医師としての使命感を抱えつつ、万博における日本の顔としてホステスを務めるといふ、矛盾に満ちた立場に置かれます。

表では「未来の象徴」として立ち続け、裏では「語られない声」に耳を傾ける――

その姿勢は、声を上げることすら許されなかった当時の女性や被差別層の沈黙の抵抗を象徴しています。

episode III の特徴は、その怒りや葛藤が決して過激な言動ではなく、日常の所作を通じて丁寧に描かれている点にあります。彼女は叫ばない。けれど、心の奥底で確かに「違和感」を抱いています。

その感覚こそが、episode V の主人公・陽に受け継がれていく思想の芽なのです。

陽は、母のように沈黙の中に生きるのではなく、植物の語りや香りの記憶を通じて、「未来とは誰のものか？」を問う存在となります。

つまり、涼香の怒りは陽によって癒しへと変換され、言葉ではなく香りとして世界と対話する次の世代の批評性が生まれるのです。

この母娘のあいだにある表現の断絶と思想の連続こそ、『20世紀エコテック少女』という作品全体を貫くもっとも重要なテーマのひとつです。

怒りが語る言葉から香る記憶へと変化する構造は、単なる家族の感情の物語ではなく、歴史的抑圧と個人の尊厳が交錯する場において、どのように「未来」が受け継がれていくかを問うものです。

これは、「国家が描いた未来」に、少女が違和感を抱く物語であり、万博という祝祭空間で語られる理想と、描かれなかった現実とのあいだに、涼香は立ち尽くす。

episode 三は、未来の嘘に気づいてしまった少女が、声にできない怒りと向き合う章である。

だがその沈黙こそが、のちに娘・陽が語る香りへと繋がっていく。
拒絶と再接続——『20世紀エコテック少女』の思想の核心は、ここから始まる。

チャプター 電気通信館

1日外涼香 1970年



1970年3月15日千里丘 気温 4℃曇

「こちらは、大阪万博会場。会場からの生中継をお届けします——」
カメラのジャバラのように長く伸びた黄色いテント張りの待ちデッキ。

その内部には、未来の電話、ファクシミリ、テレビ会議、——当時の最先端が揃っていた。

「今さら、世界と繋がる、言うてるけど、目の前の叫びすら届かんかったの、どこの未来なん？」

涼香は、展示されていた「未来の電話」を手に取る。プッシュボタン式、コードレス、映像付きの端末。その横には、通信衛星からのリアルタイム映像が映し出され、世界と今が繋がっていた。

「声や映像が届いても、肌は触れられへんし、温度もわからへん。

寒い国と繋がっても、こっちは春の匂いやし。画面越しの息は届かん……」

「技術がどれだけ進んでも、孤独は減らへんのちゃうか？」

彼女は手帳に、こう記した。

「思いは届く。でも、温度は伝わらへん。未来は繋がってるけど、ふれてへん未来かもしれん。
未来の通信は、心を伝えられるやろか？」

チャプター 生活産業館

一日外涼香 1970年



未来住宅の展示に、紺色シャツ、白いベストとパンタロン、カツラを被ってホステスは同じ髪型（帽子として）、大きめの紺ネクタイのホステスたちが整然と立っている。

来場者たちは目を輝かせながら、ガラスのキッチン、リモート冷蔵庫、自動化された浴室に歓声をあげる。涼香は、その白さに目が眩む。

「ほんまに…キレイや。けど、なんやろ、この違和感」

「無菌。無臭。無音。それは「暮らし」やなくて、「管理された環境や」

「ハニーハウス」では、朝の目覚めから夜のまどろみまでの1日の生活の流れが、28企業で演出されていた。父・母・子の三人家族。ソファに座る微笑む女。でもそこに、涼香の家はなかった。

「うちのおかあはん、こんな笑い方してへんかった。手え真っ赤にして、風呂もご飯も全部一人でやっとなんや…」

彼女の実家は、部落地区の長屋。鉄骨とトタンでできた家。お湯は五右衛門風呂、井戸水は冬は氷のよう。

「けど、それも生活や。なんで、このバビリオンには、あかん生活とええ生活があるみたいに

見えるんや？」

別のホステスが小声でこぼす。

「こういう展示って、ほんまにふつうの暮らし見せなあかんのよ。

なんか変な地域とか写ってたらクレーム入るんやって」

「変な地域？それって、うちの住んでたところか？」

ある大型スクリーンに、未来の関西都市構想が映る。

高層マンション、高速道路、緑の歩道。

でも、涼香が育ったあの町は…どこにもなかった。

「無いんや。地図の上から、まるごと消されたんやなくて、最初から存在してへんみたい、描かれてへん…」

展示は、未来を語る。

けどそこに語られない過去と現在が、涼香の胸にズシリとのしかかる。

会場を出た夕方、空は灰色。

パビリオンの裏手、来場者の見ないバックヤードに、使い捨てられた紙コップやパンの袋、吸殻が散らばっている。

涼香はしゃがんで、ひとつずつ拾いながら呟く。

「未来を見せるんやったら、隠したもんまでちゃんと見せんと、ほんまの生活にはならへんやろ」

彼女の手は、ゴミの油と土で汚れていく。

けれどその手には、かつての母と同じ、「ほんまもんの生活」が宿っていた。

チャプター

大韓民国館

一日外涼香 1970年



大韓民国館の入口に飾られたのは、色とりどりの伝統衣装「チマ・チヨゴリ」と、民衆の暮らしを再現した農家のミニチュア。

館内には、朝鮮王朝の屏風や陶磁器、書画、そして漢方薬草の展示が静かに並ぶ。

近代の展示では、植民地時代の痛みと、それでも失われなかった日常の再生が描かれていた。

控室でのことだった。

日本館の休憩エリア。ホステスの一人が、涼香に声をかける。

表情には笑みが浮かんでいたが、声の温度は低かった。

「ねえ先生、あなた…あの辺、出身なんですよ？」

「うちの親、そーゆう人から注射とかされるの嫌がるのよね」

「あたしだったら、いくら医学部出ても、気持ち悪くて無理」

周囲のホステスたちが凍りつく。

それでも誰も、間に入らない。

「それを言ったらあかん」とすら、言わない。

まるで、目の前の違和感が「空気」になるのを見ただけだった。

涼香はただ一言だけ、静かに答えた。

「あなたが注射せんでええ体に産まれたことに、感謝しとき」

その足で大韓民国館へと向かった。

何かに引かれるように、黙って展示を見て回った。

展示の隅、韓国の女性医師が書いたという「村の診療日記」が紹介されていた。

朝鮮戦争で夫を失い、蔑まれながらも診療所をひらいた女性の話――

彼女は最初、誰にも診てもらえなかった。

けれど、一人の子どもが咳をして来たときから、少しずつ世界が変わり始めた。

涼香はふっと息を漏らす。

「蔑まれる場所って、国がちやうても似とるんやな」

「それでも診るって選んだ人…おるねんな」

ガラス越しに見える、韓服の刺繍糸がきらきらと光る。

その繊細な糸は、ちぎれそうで、けれど決して途切れなかった。

涼香の胸の奥にも、何か結び直されるような感覚が残った。

チャプター お祭り広場

一日外涼香 1970年



—1970年4月4日（土）万博・お祭り広場—

空はうららかな春の陽気。

しかし、太陽の塔の裏側、お祭り広場の外れでは、数十人のグループがプラカードを掲げていた。

《西淀川の空にも未来を》 《娘をかえせ》 《きれいな水を きれいな空気を》

それは、兵庫尼崎と大阪此花・堺の大工場の煙が大阪・西淀川に集まる、もらい公害——

大阪・西淀川地域の有志による、非公式のデモだった。

万博警備員（エキスポシスター）、貴賓接遇係（エスコートガイド）が見て見ぬふりを決め込むなか、参加者たちは声を荒げず、静かに立っていた。

その「沈黙」こそが、訴えだった。

そんな空気を知って知らずか、広場の中央では、セルジオ・メンデス&ブラジル'66のライブがはじまっていた。ステージ上には、おもちゃのような14mの2体の照明音響演出ロボット、デメとデク。

大きな目のようなライトを瞬かせ、曲にあわせて体を左右に揺らしている。

観客たちは笑い、手拍子を送り、シャッター音が絶えない。

その人だかりの端に、白いホステス制服の涼香がいた。

身体はそこにあっても、心は別の場所にいた。

尼崎の診療所。ゼーゼーと咳き込む子ども。

苦しみなながらも、「先生、うちの町に万博くるん？」と聞いたあの声。

「ここが『未来』なら……あの子らの場所は、どこなんやろ」

ピアノのリズムが跳ね、パーカッションが心臓を揺らす。

けれど、涼香の耳に響いていたのは、別の鼓動だった。遠く、プラカードを掲げる母親の姿。それを押しとどめようとする警備員。

そっと泣きそうな顔を隠す、幼い男の子。

照明ロボット・デメが彼女の方へ顔を向けたように見えた。

片目のスポットライトが一瞬、涼香の胸元を照らす。その光のなかに、白衣の記憶が浮かぶ。公害病の診断を記す、あの診察カード。「未来の展示の裏に、排除された日常がある」

音楽は終わらない。観客は踊り続ける。デメとデクは、無邪気に光を振りまく。

けれど涼香は、ひとり立ち尽くす。軽快なビートと、重い記憶の狭間で。

その手には、観客に配られたパンフレットが握られていた。

人類の進歩と調和と書かれた文字が、手汗でにじんでいた。

太陽の塔の影が広場に伸びる頃、プラカードの人波は、警備に誘導される形で姿を消した。

涼香はポツリとつぶやいた。

「どの音も、ぜんぶ聴こえる耳を、未来に持てるんやろか」

その横で、デメとデクは、ただ光を点滅させていた。

チャプター

アメリカ館

1日外涼香 1970年



大林組が施工しアメリカ陸軍極東東地区工兵隊が工事管理した、空気膜構造のドーム型パビリオンには、戦争と祖国に対する複雑な想いを抱えていた青年と宇宙開発、月の石、ベーブ・ルース愛用バット、ユニホーム、ネイティブアメリカンやイヌイットの文化遺産……そして「自由の象徴」として展示された「台の「FH」そのバイクは、ガラスの向こうに置かれていた。

磨き上げられたクローム、白い車体、星条旗を背負ったポスター。

「自由」と「正義」を掲げる国家の象徴。だが、それは止まったまま。

「これが自由？ 展示ケースに閉じ込められたエンジンが？」

そんな中、涼香がひとりで休憩していた館の裏手で「WINTER COMBAT JACKET」

(後期型タンカースジャケット)を着た車両整備員風の男が座り込んでいた。

「展示されるより、走ってる方が好きだけだな。僕も同じパンヘッドエンジンに乗っているからわかる」

国務省資格試験に合格し、アメリカ館ボランティアガイドとして来日していた青年「ジェイソン」との出会い。

涼香は彼に問う。

「あんたら、自由って言葉、便利に使いすぎやない？」

「わかってる。自由の名で、どれだけの国に爆弾落としかか。」

「展示されてるバイクも、大東亜戦争で使われとったのと同じのとちやうか？ ベトナム戦争でも…

自由は時に、制圧の名前を隠す仮面やけど、それでも信じたい。止まんエンジン音を…」

ある晩、閉館後のアメリカ館。

誰もいない中で、ジェイソンは展示の「E」の鍵を持って現れる。

「一度だけ、あいつに火を入れたい。ショーケースの中じゃなく、日本の夜の風の中で」

涼香は止めようとした。でも、気がつけば――

二人はケースをこじ開けて、バイクに火を入れていた。

「うちが乗る。メグロと一緒にやろ！」

(メグロ＝目黒製作所 日本で最も長く活動したバイクメーカー。その後KAWASAKIに吸収)

ドロドロドロ……ッという轟音。

ガラスの中の象徴が、生きたマシンとして夜の万博を走り出す。

「うちらは、あの塔の中に押し込まれへん。星条旗も月の石も、未来のふりした見せもんや。」

涼香の目が月の石を射抜く。

「自由の皮かぶって爆弾落としたん、どこの誰や。戦利品を希望言うて、笑わすな。」

展示された時点で、未来はもう死んだら。」

誰もが「展示される自由」ではなく、「走り出す自由」を持てる未来を

チャプター
ガスパビリオン

―日外涼香 1970年



1970年4月8日。午後5時45分。

涼香は日本館と救護ブースの行き来をしてから、約1ヶ月、転倒事故、来場者の過密による小さな混乱に目を配りつつも、それはどこか「夢の空間」のなかの出来事だった。

そこへ突然、無線が入る。

「大阪市大淀区(現北区)、地下鉄工事現場付近で爆発事故発生。死傷者多数——」

次の瞬間には、彼女は動いていた。

「ジェイソン、バイク貸して——！」

アメリカより持参した彼の愛車、原型を留めない程カスタムをされた68年「E」を操り、涼香は会場を飛び出した。

現場にたどり着いた時、そこは地獄だった。

吹き飛んだ歩道、焼け焦げたアスファルト、そして：横たわる人々。

辺りに充満するのは、焦げた鉄と血とガスの臭い。

都市の心臓が、腐っていた。

事故現場は、未指定の同和地区であることを理由に、救急車の進入は遅れ、報道も遅れた。

誰もが「爆発」よりも「差別」の処理を優先した。

「何人、死んだん……？」

誰にも答えられなかった。

ジョアン・ミロの巨大壁画、「無垢の笑い」が展示されている、^ニ笑いがテーマのガスパピリオン公開は、一時中止となる。

近未来の^ニ快適な暮らしを描いた映像展示、都市ガスによる^ニクリーンなエネルギーの模型。それらすべてが――

人命の重さに耐えきれなかった。

**

手記には

「便利の裏には、目に見えへん^ニほころびがある。それを無視したら、都市そのものが人を殺す。」と記載されている。

**

万博会場に戻った涼香は、パピリオンの休止を報じる張り紙を見つめながら、つぶやく「技術だけが進んでも、心が止まったままなら、それは^ニ未来^ニやなくて、^ニ暴力^ニや。」

「^コエのエンジン音が彼女の胸に残っていた。それは、誰かの命を迎えに行った音だった。」

（天六ガス爆発事故… 死者79人、負傷420人。慰霊碑は国分寺公園に埋設）

チャプター タカラ・ビューティパビリオン

一日外涼香 1970年



地下1階、地上4階建てで、鋼管とステンレスカプセルの結合により構成された独創的な建築で、観客は各カプセルの展示室を巡るようになっており、心身代謝を強調するメタボリズムなデザイン。鋼管とステンレスカプセルの結合により構成された、博会場の一角にそびえる、キラキラした建物。

中に入ると、くるくると回ると未来のおしゃれフロア——自動シャンプー機、自動ネイル、音声で動くメイクアップロボット。

「美しく生きるよろこび」

壁に映し出されたスローガンの下、モデルたちがサイボーグみたいな白いワンピース姿で笑顔を浮かべている。

「美って、誰が決めるんやろな。…これ、量産型の理想やろ。」

涼香は鏡越しに、自分の顔を見る。

日焼けした肌。ニキビ跡。医師の証しである目のクマ。

隣の女の子が「将来はビューティナースになるの」と嬉しそうに言う。

「あなたの夢、誰が刷り込んだんやろな…」

自動メイク台の横には、皮膚の色を測定し最適な白さを選ぶ機械。
白ければ白いほど「美しい」と数値が上がる。

「うちは、同和地区の生まれや。

白い肌も、白い血筋も、持ってへん。

せやけど……うちの美しさは、他人に決められへん。」

エレクトロニクスメディアを使って、自然音、機械音、現実音、ことばなどがミックスする演出、
無数のスプレーと整髪料が舞うショーの空間。

涼香は、鼻をつまむようにして外へ出る。

「これは、未来のビューティやない。未来の消費者を育てる装置や」

Episode Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ
次巻以降
ダイジェスト
紹介

■ Episode 1 『おしの痛み』（1960〜神戸）

主人公… 涼香（幼少期）

主題 … 差別と家族／「声なき声」を聴く感受性の芽生え／差別と医の目覚め

- 内容… 実家の風景、医療に目覚めるきっかけの内省
- 構成視点… 両親との関係／「生活」とは何かの原点
- 差別・階級の最初の痛み。
- 「医師になるという」「手の思想」の出発点。
- 見過ごされた者たちへの目覚め。
- 涼香は部落地域で育ち、成績優秀にもかかわらず、親の転居で「見えない線」による差別を受ける。
「名字の響きや住所によって友人関係や進学に影が差す。
- 差別と偏見の中、母が倒れたことをきっかけに医師を志し、周囲の冷笑を押し切って医学部に進学。
医大での解剖実習中、「差別される身体」への怒りと人間の命のはかなさを知り、インターンで訪れた水俣で命に対する強烈な責任感を抱くように。

■ Episode II 『つんぼの万博前夜』（1968～69 尼崎）

主人公… 涼香（医師）

主題… 公害と思想のはざま／医療と産業の板挟み／公害と思想闘争

・ 内容… 気管支炎の少年、汚染された河川、都市開発の欺瞞

・ 構成視点… 高度経済成長の矛盾と個人医師の葛藤

・ 「エコ」という言葉が現れる前の「毒と戦う暮らし」。

・ 「思想」と「闘争」が繋がる。

・ 花も草も咲かぬ土地での葛藤。

万博に反対する学生運動、安保闘争やゼロ次元、万博キリスト教館推進派と絡み、

差別と公害問題が浮上する。

万博建設現場から運ばれてくる倒れた日雇い労働者や、学生運動で怪我をした若者、

公害病患者の治療に奔走する。

■ episode IV ～Reloaded～ 『未来に花は咲くか』（1985-89 尼崎）

主人公：陽（思春期）

主題：ハープと記憶／母娘の断絶と癒し／癒しと再接続

- ・ 内容：ハープの薬理性と身体記憶、未来への香り
- ・ 構成視点：母が拒絶し、娘が向き合う『草』の世界
- ・ 母と娘の断絶と対話。
- ・ ハープと草花の「語らない記憶」への理解。
- ・ 咲かなかった花に、名前を与える前夜。

～episode V のゲームソフト発売にかけての販促誌の内容を抜粋～

キャッチコピー：「痛みは、土の中に生きている。七色の花は、それを知らないふりをする」

サブコピー：

1970年、大阪万博——国家が夢を見せたあの場所で。

1990年、鶴見緑地で再び咲こうとする。未来は、誰の手で育てられるのか。

母の怒りも、痛みも、希望も、ジャケットに包まれて娘へと継がれる。

未来は、展示するもんやない。生き抜くことからしか始まらへん——。

かつて、未来のショーウィンドウとして開かれた1970年万博。

だがその裏で、ひとりの女性医師・涼香は、異国の夫との結婚、公害病の渦、そして見えない差別と闘い続けていた。

——母と娘、二つの時代を越える思想のリレーが、今ここに。

ストーリーに関わる キーワード

部落問題の起源

部落問題は江戸時代の身分制度に起因しています。江戸時代、日本の社会は武士、農民、職人、商人、そして最下層の「穢多」や「非人」といった身分に分かれていました。この時期、穢多や非人は差別的に扱われ、社会的に低い地位に置かれていました。これが部落問題の根本的な起源です。

身分制度は日本全国に存在しましたが、その影響が特に強かったのは西日本の地域でした。西日本には、江戸時代から続く伝統的な社会構造や、地域ごとの習慣が色濃く残っていたため、部落問題が根強く残る原因となりました。部落問題が西日本で特に深刻である理由の一つは、地域ごとの土地制度や社会構造にあります。西日本、特に関西地方では、封建制の影響が長く続きました。

土地所有者とその下に位置する農民や職人、さらには穢多非人との間に強い社会的壁が存在していました。また、西日本は商業や手工業が発展していたため、都市化が進み、部落問題が都市部にまで広がったことも影響しています。特に大阪や京都といった大都市では、部落民が多く居住していた地域があり、社会的な分断が強まりました。一方、東日本では、江戸時代の初期から明治時代にかけて、比較的早い段階で改革が進められました。幕府の支配が強かったため、身分制度の影響は西日本ほど顕著ではなく、都市化が進んだため、部落問題が目立つことが少なかったと言えます。

○ 同和団体（どうわだんたい）

日本の部落問題に関連する当事者団体を称する団体で利益団体としても活動する。

小さな独立系団体を除き、異なる連携政党を持つ4つの全国の大きな同和団体が存在し、運動方針においてそれぞれ独自の路線を打ち出している。日本国政府が交渉対象団体として認めているのは、自由同和会（自民党系）と全国地域人権運動総連合（共産系）と部落解放同盟（社会党・民主系）の3団体である。

○ 部落解放同盟

日本社会における部落差別の撤廃を基軸とした取り組みを通して、あらゆる差別の撤廃をめざしながら、国内の人権・平和・環境を中心とした社会正義を追求する運動体である。

これらのとりくみを推進し所期の目的を実現していくためには、部落解放同盟自らが、全国水平社以来の輝かしい伝統を正しく継承するとともに、今日の民主的な社会的ルールや法令に基づいて公正で透明性のある運動や組織運営を確立し、同盟員はもとより未組織の部落大衆や社会全体から信頼される存在でなければならぬ。

部落差別は全体としては解消の方向にあるものの、なお根強く存在し、一部にはそれを拡大助長する動きもあると主張。政府が交渉対象団体とする同和団体の中で唯一、糾弾を部落解放運動の生命線と位置づけている。

糾弾（きゅうだん）とは、主として部落解放同盟関係者が、「差別された」と判断した事案において、差別対象の実行者とみなした者や、その者に関係する上位の立場にある者も同様に差別対象の責任者であるとして呼び出し、差別行為の事実確認という名目で吊し上げ、その責任を問う中で部落問題に対する認識姿勢を糾して総括と称する自己批判をさせて、差別とみなした行為の謝罪と補償を強要することである。あまりにも長期間かつ苛烈なことで、吊るし上げられた者達は要求を呑み、精神的疾患やトラウマを負うことで知られた。

○ 部落産業

被差別部落の生業を起源とする産業や被差別部落出身者が多く従事している（と、世間一般でみなされている）産業の事で、食肉業、皮革業、葬儀業、廃棄物処理業、太鼓製造業などの産業をいう。全体的に見て、動物や人間の遺体に関連する産業が多い。（関連▶同和对策事業、えせ同和行為）

○ 部落産業

被差別部落の生業を起源とする産業や被差別部落出身者が多く従事している（と、世間一般でみなされている）産業の事で、食肉業、皮革業、葬儀業、廃棄物処理業、太鼓製造業などの産業をいう。全体的に見て、動物や人間の遺体に関連する産業が多い。（関連 .. 同和对策事業、えせ同和行為）

○ 部落問題

部落差別（同和問題）は、日本社会の歴史的過程で形作られた身分差別により、日本国民の一部の人々が、長い間、経済的、社会的、文化的に低い状態に置かれることを強いられ、同和地区と呼ばれる地域の出身者であることなどを理由に結婚を反対されたり、就職などの日常生活の上で差別を受けたりするなどしている、我が国固有の人権問題です。

1969年（昭和44年）にようやく「同和对策事業特別措置法」が制定されてそれ以降、さまざまな取り組みの結果、環境整備が進み同和地区内外の較差は概ね解消されました。

その後、2002年（平成14年）3月、「地域改善対策特定事業に係る国の財政上の特別措置に関する法律」（地対財特法）が失効し、国の特別対策としての同和行政は、全て終了しました。

こうした同和对策事業の経緯を踏まえ、同和問題にかかわる差別意識の解消に向けた取り組みは、1997年度（平成9年度）以降、すべての人の基本的人権を尊重していく人権教育、人権啓発事業の一環として推し進められることになりました。

2000年（平成12年）には「人権教育及び人権啓発の推進に関する法律」が施行され、これに基づき2002年（平成14年）3月に「人権教育・啓発に関する基本計画」が策定されました。基本計画では、取り組むべき人権課題を12項目挙げ、同和問題もその一つとして位置づけられました。

○ 解放新聞

部落解放同盟の中央機関紙。発行元は大阪市港区の解放新聞社。

なお、部落解放同盟全国連合会の機関紙である「部落解放新聞」は別の新聞。

注釈

本来、名前（氏・姓）で被差別部落出身者とは、判別することは出来ないが「20世紀エコテック少女」では、
・ 『日外』＝「日」の当たる世界の「外」側との意味で句わせ（姓の由来は後花園天皇の御子の氏）
・ 聞き慣れない姓

で差別対象だと誤認させる為にこの名前を付けている。

なぜ、娘の陽が母のジェイソン姓ではなく「日外」氏を使っているのかも次巻で説明する。

EXPO'70 日本万国博覧会 (万博)

会期 1970年(昭和45年) 3月15日(日曜日) から 9月13日(日曜日) までの開催183日間
場所 大阪吹田市千里丘

プロデューサー 丹下健三

テーマ 「人類の進歩と調和」 (Progress and Harmony for Mankind)

海外参加 76カ国、4国際機関 1政庁(香港)、アメリカ3州、カナダ3州、アメリカ2都市・2企業、ドイツ1都市

国内参加 32団体、展示施設 32施設

(日本政府、日本万国博覧会地方公共団体出展準備委員会、 2公共企業体、 28民間企業等) 会場内には118の展示施設

入場者数 642万870人 1日の最高入場者…83万 6千人 ※9月 5日(土)に記録 平均入場者数… 35万人

会場面積 330万㎡

入場料 大人(23歳以上) … 800円 青年(15〜22歳) … 600円 小人(4〜14歳) … 400円
※当時の平均月収は5万円

万博のシンボルマークのデザイン 大高 猛氏

EXPO'90 国際花と緑の博覧会 (花博)

会期 1990年(平成2年) 4月1日～9月30日(183日間)

場所 大阪市「鶴見緑地」(一部守口市)

テーマ 「自然と人間との共生」

ねらい 花と緑と人間生活のかかわりをとらえ、21世紀へ向けて潤いのある豊かな社会の創造をめざす。

博覧会の性格 (EXPO'70 EXPO 2025は一般博/登録博)

国際博覧会条約に基づく特別博覧会であり、東洋で初めての開催される
大国際園芸博覧会である。

参加国 83カ国(国内含む)・55国際機関・221企業団体

開場時間 4月1日～4月26日午前9時30分～午後10時

4月27日～9月30日午前9時～午後10時30分

入園料 大人普通入場券 2990円(消費税3%込)

※当時の大卒初任給は20万円前後

入場者 2312万6934人

会場面積 約140ha(駐車場・関連施設等を含む)

兵庫県尼崎市公害問題の背景

大気汚染（工場のばい煙・自動車排ガス）

・ 1950～60年代にかけて、国内の火力発電所総出力の31%を占めるまでになり、尼崎は「鉄のまち」とよばれる。

鉄鋼・化学・製紙・石油などの工場が集積し、深刻な大気汚染が発生し加えて車の騒音、排ガスで

道路公害も

国道43号線で発生。

・ 硫黄酸化物（SOx）、窒素酸化物（NOx）、粉じん、煤煙が大量に排出され、ぜんそくや気管支炎などの健康

被害が多発、水質汚濁、土壌汚染、産業廃棄物不法投棄問題も発生

・ 1970年、尼崎公害訴訟が起こり、企業と国の責任が問われる。

・ 1980年代に入っても依然として大気汚染は深刻で、特に国道43号線沿いの排ガス汚染が問題となる。

80年代の尼崎市公害問題

認定患者の中にも、大気汚染の源である工場で働き、生計を立てる人は多い。喘息は苦しいが、職を失いたくない。こうした理由で、患者であることを隠す市民も多く、複雑な感情を抱え知らないうちに、被害者にも加害者にもなりえた。

公害病患者の訴訟

1988年（昭和63年）12月、尼崎市の公害病認定患者とその遺族483人が、国、阪神高速道路公団、電力・鉄鋼などの企業9社を相手取り、大気汚染物質の排出差し止めと総額約18億円の損害賠償を求めて神戸地裁に集団訴訟を起こす。

背景

1988年3月に改正公害健康被害補償法が施行され、大気汚染指定地域41か所（尼崎市含む）が全面解除され、公害病患者の新規認定打ち切り。

問題

しかし、尼崎市では依然として工場の煤煙や自動車の排気ガスによる大気汚染が深刻で、認定打ち切りにより新たな患者が補償を受けられない事態に。

公害の被害状況

- ・ 1970年12月からの累計で公害病認定患者1万1208人、死者1695人に達する。（1988年11月現在）
- ・ 二酸化窒素や浮遊粒子状物質の測定値は悪化傾向を示し、大気汚染がより深刻化。

意義

この訴訟は、全国の大気汚染訴訟とともに、後退傾向にあった国の環境行政に転換を迫る大きな控訴になる。

まとめ

尼崎市は、戦後の高度経済成長期に重化学工業が集積した影響で、大気汚染・水質汚濁・土壌汚染などの公害問題が深刻化しました。

70年代以降、公害防止条例の制定や環境基準の強化、大気汚染訴訟などを通じて改善が進められたものの、1980年代に入っても依然として問題は継続。（大阪市にも同様のもらい公害で控訴、西淀川公害訴訟）特に1988年の公害病集団訴訟は、公害被害者の権利を守るための重要な転換点となる。



尼崎市の臨海部に集積していた工場群の様子
(昭和39年頃、「図説 尼崎の歴史下巻」より)

なお、訴訟に先だって 1971年 6月 5日に結成され、原告団の母体となった「尼崎公害患者・家族の会」が、被告企業との和解金の一部により患者の健康回復や町の再生を図るための活動拠点「尼崎ひと・まち・赤とんぼセンター」を1999年 9月 19日に大物町に開設(2011年 6月同センター解散が決定され、2012年 8月 10日に同じく大物町に開設した「赤とんぼの里」が活動を継承)、2001年 3月 23日には「尼崎南部再生研究室」(南城内、2009年 8月武庫之荘に移転)を開設した。原告団・弁護士解散後も「尼崎公害患者・家族の会」は活動を継続したが、2019年(令和元) 6月 30日をもって「尼崎公害患者・家族の会」と「赤とんぼの里」を解散した。当時、工場が立ち並び煙突が林立していた「公害の街」といわれた尼崎市臨海部は、2023年(令和4年)以降は、アマゾンの西日本最大物流拠点「アマゾン尼崎フルフィルメントセンター」。

越境汚染(もらい公害) 西淀川公害訴訟

高度経済成長の時代に近隣の自治体にある工場で発生したスモッグ公害が越境汚染を起こした。主な汚染物質としては、特に自動車の排気ガスや工場の煙などに含まれたり、排出されたあとに変化したりする、二酸化硫黄(SO₂)、浮遊粒子状物質(SPM)、光化学オキシダント(O₃)、二酸化窒素(NO₂)などが上げられる。

1963/2 西淀川保健所の測定で二酸化硫黄濃度は0.382ppmを記録
朝日新聞、「視界は50メートルにも達しない」と報じる。

オウム真理教の顧問弁護士が入信前に当訴訟に関わっていた。

サブカルチャーの状況

・黎明期のオタク文化

1970年代～80年代初頭にかけて、アニメ・特撮・ゲーム・SFなどのジャンルに熱中する層が増え、「オタク」という言葉が使われ始める。

・社会的認識

当時はまだ「オタク」は一部のマニア的存在として見られており、一般社会との関わりは薄かった。

例：『宇宙戦艦ヤマト』（1974）、『機動戦士ガンダム』（1979）のファン活動が盛り上がり、アニメファンがイベントや同人誌活動を活発化させる。

・ゲーム・パソコン文化の発展1980年代には、ファミコン（1983）やMSXなどのパソコンが登場し、ゲームやプログラミングに熱中する人々が増加。当時の報道も、オタクを「奇妙な趣味を持つ人々」として紹介することに、とどまっていた。

急速にサブカルチャーが認知される一方で、80年代前半までは、「オタク」は単なる「アニメやゲームに詳しいマニア的存在」として認識されはじめたが、

社会的に「異端視」とされることはあっても、それが「犯罪」と直結するような偏見はなかった。

転換期 東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件

事件の概要

- 1988年から1989年にかけて、東京都と埼玉県で4人の幼女が誘拐・殺害される。
- 犯人・宮崎勤は遺体に対する猟奇的行為（わいせつ行為、屍姦、食人行為、など）を行った。
- 犯行後、被害者家族に遺骨を送りつける、新聞社に犯行声明を送るなどの異常行動も取る。
- 1989年7月、東京都あきる野市で別の女兒に対するわいせつ行為を試みたところを住民に取り押さえられ逮捕。

- 2008年、死刑執行。

社会的影響

オタクバッシングの激化

宮崎勤の自宅から大量のアニメ・特撮ビデオ、ホラー映画、ロリコン漫画などが発見されたことで、彼の趣味と犯罪を結びつける報道が過熱。これにより、オタク文化が大きな誤解を受けることになった。

報道による誤解と風潮

- 「オタク＝犯罪者予備軍」という偏見が広がる。
- 事件後の翌1990年のコミックマーケット38の参加者は加熱報道の煽りで23万人を数え、1年で倍以上増加した。

警察の過剰対応

- アニメキャラの絵が描かれた紙袋を持っているだけで職務質問や所持品検査を受ける。
- 公園で昼休憩している男性が「児童を物色している」と疑われ、職務質問、家宅捜索が行われるケースも発生。

メディアの煽り

- ・ コミックマーケットの取材で「ここに10万人の宮崎勤がいます」と報道されたと言われている。
- ・ 美少年に走る「女宮崎」はキミのクラスにも1人いる！出典：『Tennis』1989年9月6日号見出し
- ・ 『：宮崎のクローンみたいな連中ですよ。』（サークル関係者）出典：『週刊文春』1989年8月31日号
- ・ 「ロリコン5万人 戦慄の実態 あなたの娘は大丈夫か？」
- ・ アニメ・漫画愛好者に対する社会的なバッシングが加速。

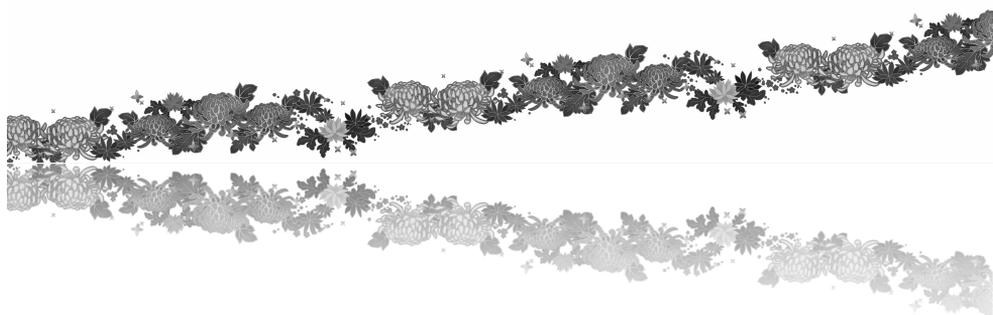
有害コミック規制運動へ

宮崎事件をきっかけに、「アニメ・漫画・ホラー映画などのオタク文化が犯罪を助長する」という「メディア効果論」（暴力的なコンテンツが人間に悪影響を与えるとする理論）が勢いづいて、有害コミック規制運動が活発化し、政府・自治体レベルでの規制が進み有害と思われる、アニメ再放送禁止、漫画の絶版、アニメ漫画情報誌・雑誌出版社の廃刊・休刊が相次ぐ。

報道の終息

この事件に関連する過熱報道は、1993年の今上天皇（徳仁天皇）のご成婚まで続いたと言われている。宮崎勤事件による「オタク＝異常者」という偏見は、その後のオタク文化の発展に長期的な影響を与えたものの、2000年代以降は「クールジャパン」政策やアニメ・ゲームの世界的評価の高まりにより、払拭された。

「咲かされた未来」ではなく、「耕しなおす未来」へ。
少女たちは名づけられていない〈花〉に、未来の名前を託す。



『20世紀エコテック少女』 名づけられなかった未来 ～クロニクル～ Volume 1

制作・著作 haniyasubime
発行 エコテック製作所
初版発行 第一版 2025年7月31

連絡先 haniyasubime@icloud.com
instagram <https://www.instagram.com/haniyasubime>



※本作はフィクションです。登場人物・団体名とは関係ありません。

<https://bsky.app/profile/haniyasubime.bsky.social>

■ EP1~EP2 一部公開

